

はちおうじ物語 其の六

桑都八王子は織物のまち



なぜ、八王子は“桑都”と呼ばれるようになった？

八王子は、古くから養蚕が盛んな地域として知られ、江戸時代中期ごろから生糸や絹織物が盛んに商売されていました。八王子の風土の中で育まれた産業のルーツを探り、現在につながる「ものづくり」の原点を見ていきましょう。

繭から糸が紡がれる

八王子が桑都^{そうと}と呼ばれるようになった由縁は、西行が詠んだという短歌「浅川を渡れば 富士の雪白く 桑の都に青嵐吹く」にあります。この歌は、江戸時代後期の随筆に記録されており、このころ栄えてきた八王子宿の織物市のにぎわいを背景に「桑都」と言い習わされてきました。日本で「桑都」と称されるのは八王子だけです。

江戸時代の八王子は、宿が整備され、市場が立ち、周辺の村々からの繭や生糸、織物の集散地として栄えました。明治時代に入ってから、萩原彦七製糸場などの大規模な製糸工場が建てられ、大正時代になると手機^{てばた}から力織機^{りきしよつき}へと電化していきました。第一次世界大戦(大正3年)ごろの日本経済は、かつてない好景気となりました。大正時代の八王子の産業の中心は織物業でしたが、甲州街道沿いには商業も発展しました。

織物業の躍進に支えられ、大正6年(1917年)に、八王子は東京府下で2番目に市制を施行しました。その後、第二次世界大戦による被害で、織物の生産は大幅に落ち込みましたが、生産者の努力により回復し、戦後の一時期は「ガチャ万」(「ガチャ」っと織れば「万」と儲かる)と呼ばれるまでになりました。その後、着物の生地だけでなく、ネクタイ・ニット・マフラー地など種類を増やし、現在では世界に向けてテキスタイルを発信し、「多摩織」の技術は職人の手技によって継承されています。



多摩織の技術を継承している織物工場



織物のまちの面影が残るのこぎり屋根の建物

桑都ことはじめ

八王子は、江戸時代の後期から桑都として知られていました。これは養蚕・製糸・織物が盛んだったことを示しています。18世紀の初めごろ、大都市江戸では、町人の経済力が強まり、^{しまがら}縞柄の絹織物が好まれるようになりました。この影響は次第に江戸近郊の町や村に及び、19世紀に入るところには、各地に定期的に織物市が成立するようになります。この市は^{しまいち}縞市と呼ばれ、八王子の市では横山宿と八日市宿にわかれて開かれ、大変なにぎわいを見せていました。



『桑都日記』桑都朝市

養蚕と風習

「蚕を飼って繭^{まゆ}をとる」——戦前まで多くの農家では、養蚕にも力を入れていました。山がちで平地の少ない八王子では、田んぼや畑から得る収入だけでは生活することは難しく、養蚕は貴重な収入源でした。今ではほとんど見られなくなりましたが、養蚕の面影は今も残されています。小正月飾りに「マユダマ」という繭の形を模したお団子を作って飾り、どんど焼きのときに焼いて食べる行事があります。この行事は繭の豊作を祈願するものでした。養蚕とともに生まれた風習は、今も市民の間で大切に受け継がれています。



マユダマ焼き（上川中部町会どんど焼き）



桑を食べる蚕



マユダマ（上案下のセエノカミ）

織物のまち

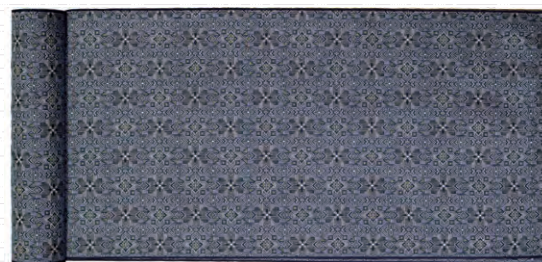
江戸時代、八王子で織られた縞の織物は、名産品の一つに数えられていました。明治時代は、男物の反物の生産地として全国的に有名になりました。織機は高機たかはた（木製手機てばたの一種）を使い、手作業で織っていました。また、繭から糸をとる大規模な製糸工場が建てられました。大正時代の初めに電気が通じると電気で動かす大型の力織機りきを使う織物工場が増えました。織物の技術は進歩を続け、昭和10年（1935年）代には、ネクタイ地など複雑な模様の布地を織る工場も出てきました。しかし、昭和20年（1945年）8月2日の八王子空襲で市内の織物工場は大きな被害を受けました。戦後、織物業は復興し、昭和30年（1955年）に開発された、毛（ウール）を用いて紋様を織り出す紋ウールが大ヒット商品となり、その後、絹とウールを用いたシルクウールを開発するなど、八王子は再び「織物のまち」として知られるようになりました。



織物工場での作業（昭和10年〈1935年〉）



ネクタイ（昭和15年〈1940年〉ごろ）



紋ウール（昭和40年〈1965年〉ごろ）

～繁盛を祈る人々～

織物に携わる人々の信仰の対象は機守様で、特に大善寺境内にあった機守神社は多くの信仰を集めました。

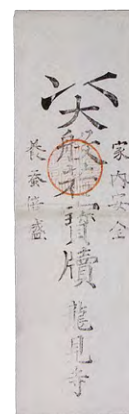
高尾山薬王院をはじめ、市内の寺社では養蚕守護の御札を出していました。繭の収穫量の多寡がその年の生活を左右するほどの重大事であったことがうかがえます。



大善寺機守白瀧姫御影軸



高尾山薬王院の養蚕守護札



龍見寺の養蚕倍盛札



伝統工芸の多摩織

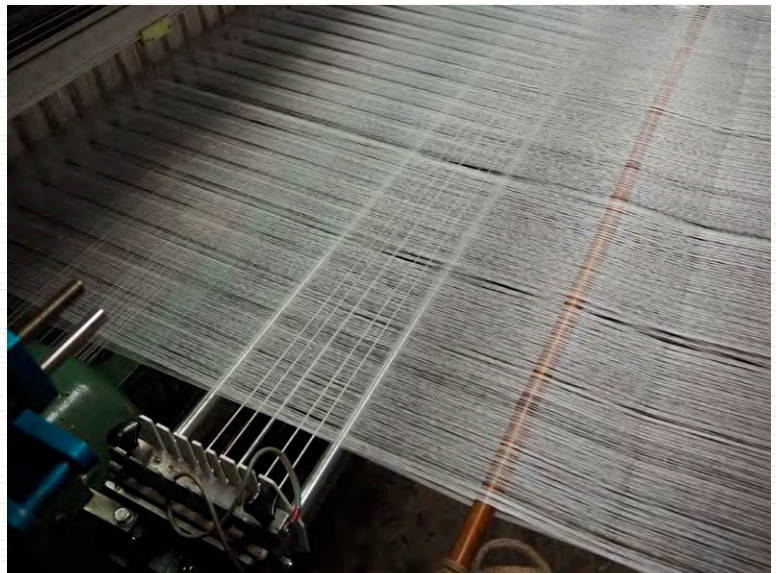
八王子には、現在に至るまで守り続けられてきた伝統的な織物があります。昭和時代初期、婦人向けの織物の開発が進み、新たに紋織りの御召「多摩結城」が織り出されました。戦時中、多摩結城の技術を途絶えさせないようにするため、一部の工場で織り続けられていました。そして昭和55年(1980年)、御召織「多摩結城」をはじめとする5種の技術が「多摩織」の名称で通商産業大臣(現経済産業大臣)から伝統的工芸品に指定されました。次いで、昭和57年(1982年)には、東京都から伝統工芸品の指定を受けました。

多摩織には、御召織、紬織、風通織、変り綴、縷り織の5種があり、いずれも着尺地、羽織地、コート地、袴地に用いられています。このうち主力商品とされる御召織は、先練り先染めの絹糸を平織、綾織、縷子織、もしくは変化織とした縮緬で、いずれも生地表面には細かいシボ(皺)が作られます。このような多摩織が現在も脈々と受け継がれてきた背景には、多摩織を織る技術の保存に努めてきた伝統工芸士の存在があります。

伝統的な織物を継承する一方で、和装洋装の枠を超えた新しい織物の開発が進められ、ジャカード織やドビー織の技法を駆使して様々な織組織が作り出されています。多摩織の技術は、長い歴史を持つ八王子織物の伝統を引き継ぎながら、次代を担うファッション界に向けて発信され続けています。



多摩織で製作した大行燈 (高尾山スミカ)



機械織の様子

～八王子織物の高い評価～

八王子では、明治10年(1877年)に開催された第1回内国勸業博覧会から、生糸や繭、織物など創意工夫をした製品を出品していました。特に織物は、回を追うごとに高い評価を得てきました。出品者の間では、さらに良い製品を作り出そうという機運が高まりました。

しかし、明治18年(1885年)に行われた繭糸織物陶漆器共進会(五品共進会)では、八王子織物は期待した評価が得られませんでした。これに奮起した織物仲買商らにより、製品の品質管理と染色技術向上を目的に八王子織物組合と八王子織物染色講習所が設置されました。以降、八王子織物の評価は徐々に上がり、機業家は独自の工夫を重ねて様々な織物を作りだし、その品質と技術は高く評価されました。



織物商標 (明治時代)

織物のまちからものづくりのまちへ ～繊維産業から先端産業へ～

昭和16年(1941年)、太平洋戦争に突入し、繊維工業は軍事産業への転換や、設備の屑化供出が求められました。そして昭和20年(1945年)8月、八王子は市街地の80パーセントが焼失となる大空襲を受け、工場数は昭和16年(1941年)のわずか20パーセントほどに激減しました。しかし、浅川により延焼をまぬかれた北側には、織物関連の工場が残りました。その後、八王子の織物産業は、戦後の復興と共に立ち直り、「ガチャ」っと織れば「万」と儲かる「ガチャ万」景気を迎えました。

戦前・戦後を通じて、八王子の地域経済を支えてきた繊維産業は、その後、海外製品の台頭などの影響により、衰退することとなりましたが、力織機のメンテナンスで培った高い技術力や織物工場の活用などを背景とし、電気機械、精密機械をはじめとする近代工業が著しく成長しました。現在では高度な技術をもとに先端産業に大きく貢献している企業が集積しており、「織物のまち」の顔だけでなく、「ものづくりのまち」としての顔も併せ持っています。

試作車開発部品

自動車・オートバイの駆動系部品



ベベルギヤ (株式会社内野製作所/戸吹町)

自社製品の開発

利用者のニーズに応える製品開発



文化財発掘に関わる用具類
(第一合成株式会社/元本郷町一丁目)

IoT

アプリ開発



IoT*を活用した山車の歴史解説アプリ
(株式会社夢現舎/南大沢一丁目)

*IoT (Internet of Things)

情報通信機器だけでなく、世の中に存在する様々なものに通信機能を持たせ、インターネットに接続したり相互に通信することで、自動認識や自動制御などを行うこと。



織物商標 (明治時代)



桑都綾織 (織物の見本帳) (明治35年〈1902年〉)



主な構成文化財

①多摩織



日本遺産

八王子で生産される織物で、御召織、紬織、風通織など5つの品種があります。昭和55年(1980年)に通商産業大臣(現経済産業大臣)から伝統的工芸品に指定されました。そして昭和57年(1982年)には、東京都から伝統工芸品の指定を受けました。

②どんど焼き



正月飾りなどをまとめて小正月(正月14日)に焚き上げる、市内各地で行われる行事です。小正月前後の休日に行う地域もあります。「どんど焼きで焼いた団子を食べると病気になる」といわれ、無病息災などを祈願して「マユグマ」(繭玉を模したお団子)を焼いて食べます。

③高月のクワ

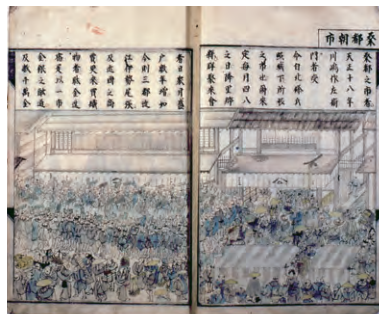


市記

〔高月町〕

山地に自生する桑の一種で、現在は根元から2株にわかれています。推定樹齢は400年です。栽培した桑による養蚕がいつごろから行われるようになったのかは定かではありませんが、当初は「高月のクワ」のような自生の桑を利用して、蚕が飼育されていたといわれています。

④桑都日記稿本



都府 古文書 日本遺産

千人同心組頭の塩野適斎が著した八王子の地誌で、「桑都」の美称が付けられています。当時の地形、気候、文化、産業や千人同心の歴史などを知るうえで貴重な史料です。郷土資料館に寄託されています。

⑤桑並木通り



〔横山町、元横山町ほか〕

「八王子駅入口」交差点から国道20号バイパスの交差点「浅川大橋南」間の沿道には桑の木が植えられており、桑都の面影を感じることができます。桑の並木は全国でも珍しく「八王子十八景」にも選ばれています。

都府：都指定有形文化財

市記：市指定天然記念物

※①は位置が示せないため地図上にはありません

※②⑦は市内各所に点在しているため地図上にはありません

※⑩は見番（三業組合事務所）の場所を示しています



⑥機守神社



〔大谷町〕

「織物のまち」として栄えた名残の一つが大善寺境内に祀られる「機守様」です。古くから養蚕と機織り、そして縁結びの神様として信仰を集めてきた白滝姫を祭神とし、現在も織物関係者や地域住民に信仰され続けています。

⑦のこぎり屋根の建物



〔平岡町ほか市内各所〕

かつて織物工場や染色工場として稼働していた工場が、市内各所に残っています。北に向けられた屋根の勾配のきつい側にガラス等の透過性のある素材を入れることで、大規模な建物でも部屋の奥まで自然光を取り込むように工夫されています。

⑧旧片倉製糸紡績八王子製糸場蚕室



〔中野上町四丁目〕

昭和12年(1937年)に片倉製糸紡績の八王子製糸場に建てられた蚕室が、当時の姿のまま今も残されており、製糸場の面影をしのぶことができます。現在は、日本機械工業株式会社が管理しています。

⑨萩原橋の碑



〔平岡町〕

萩原橋は浅川に架かる秋川街道の橋で、明治34年(1901年)に竣工しました。橋の名は、建設費を寄付した製糸家の萩原彦七にちなんで付けられました。「八王子八十八景」に選ばれています。

⑩八王子芸妓



日本遺産

織物のまちとして繁栄した中町界隈には、多摩地域で唯一の花街がありました。織物産業と盛衰を共にしてきた花街ですが、芸妓衆を中心にした再興プロジェクトが発足し、現在では約20名の芸妓衆が活躍しています。演目の中には、織物の民謡である八王子オリャセ節があり、織物のまち八王子を現在に伝えています。

文化財の保存・活用事例

つくるのいえ

中野上町は、織物のまちの“おもかげ”を残しつつ、新しい取組を模索しながら発展しようとしている町です。昭和17年(1942年)、葛飾区から奥田染工場が移転してきました。バブル期に繊維産業が斜陽産業となった時は、人とのつながりを大切に考えて染工場を継続しました。現在では、繊維関連の“ものづくり”の拠点として、生産地とクリエイター、生産地と生産地をつなぐ「つくるのいえ」(中野上町一丁目)をオープンしました。モノ・コト・人が楽しく交流する中で、八王子の織物の伝統を未来につなげる活動をしています。



多摩織の技術を継承

澤井織物工場は、絹織物の技を100年以上にわたり伝承しつつ、八王子織物の伝統を受け継いでいます。その技術は「多摩織」として、通商産業大臣(現経済産業大臣)の伝統的工芸品、東京都の伝統工芸品の指定を受けるまでに高められました。現在でも、伝統を守りつつ新しい生地や技術の開発に取り組んでいます。ブランド力の強いアパレルメーカーの製品を手掛けるほか、アメリカのIT企業にも技術供与するなど、付加価値の高いものを手作りし続けていることが世界的に評価されています。



はちもんものづくり探検隊

かつて「桑都」と呼ばれ、繊維産業の一大集積地であった八王子。今でも多くの繊維産業が残っています。また、金属や電気機械関連などたくさんの魅力的なものづくりの企業、工場が存在しています。「はちもん実行委員会」は、ものづくりに携わる企業や団体、個人を応援し、市内だけではなく市外に向けて八王子のものづくりの魅力を発信していく活動をしています。子どもたちが八王子のものづくりの現場を訪れ、職人から直接その歴史や成り立ちを学び、さらにものづくりを体験する「ものづくり探検隊」という社会科見学を開催しています。



八王子芸妓の継承と中町のまちづくり

織物産業と盛衰を共にしてきた八王子芸妓の文化が再興され、芸妓衆は地元の行事に積極的に参加して技芸を披露するなど、伝統を継承しています。また、花柳界の隆盛で栄えた「粋なまち中町」の再生を目指す住民有志の取組も進められ、商工会議所や住民が結成した「八王子黒堀に親しむ会」による花街文化の伝承と情報発信や、「中町まちづくり協議会」による伝統と文化が薫るまちの景観整備や地元主体のまちづくり活動、地元と芸妓衆のコラボレーションによる「中町音頭」の制作などが行われています。

